

インドネシアにおける日本占領統治の記憶 -Ishmael Marahiminの*And the War Is Over* 解読

河原崎やす子

Memories of Japanese Occupational Admission in Indonesia - Reading *And the War Is Over* by Ishmael Marahimin

KAWARASAKI, Yasuko

戦後 75 年と戦争の記憶

2020年の話題といえば何をにおいてもコロナ禍関連であったが、その事態は戦後75年という大きな節目に本来ならばあるべき戦争についての論考を減退させたかもしれない。とはいえ、戦後75年についてメディアはさまざまな角度からの議論を展開した。その多くは、日本にとって、あるいは日本人にとっての戦後75年についてであり、日本が与えた戦争被害という被害側観点からのものはきわめて少なかった。それは5年前の戦後70年にすでに指摘されていたことでもある¹。相変わらず欠落しているのは、日本が被害を与えた国とその人民は戦禍を決して忘れないという事実の認識と、彼らに対する配慮である。だが一方でこれらの国々は現在、様々な形で戦争被害の再検証を試みている。韓国における慰安婦問題や徴用工問題への対処はその一端を示すものに他ならない。このように、たとえ表面的には友好を保っていても、意識下に残存する戦争の被害は今なお解消したとはいえないことが折に触れ垣間見えてくる。

こうした被害国側の抱く問題意識は、しばしば文学表象に示されてきた。これまでに筆者は中国、韓国、フィリピン、シンガポール、 Guam などにおける日本植民統治を取り上げたアジア系アメリカ文学に注目し、文学がこの戦争関連の記憶をどのように表現したかを分析してきた。対象とした作品は、ほとんどがアジアの戦争被害国地域からアメリカに移住した作家によって英語で表現されたものであり、日、米、アジアといういわば太平洋地域を横断する文学だといえる。ゆえにこの文学作品群に対しては、環太平洋という枠組みが分析視点として有効であった。環太平洋地域とは、日本が植民化しそれ以前は欧米の植民地主義に蹂躪された占領と支配の歴史を持ち、現在では人々が自由と富を求めてアメリカに移住しているという共通点をもつ地域と位置づけられるからである。アジアからアメリカへ移住した作家の作品にはこういった環太平洋の視点が示されるが、それは彼らがアメリカに在住している、あるいは移住した理由が往々にして植民や戦争に絡んだものだからである。したがって環太平洋観念を突き詰めると、アメリカ中心の思考回路あるいはアメリカ志向という姿勢があるのは否めない。これはこの分析視点のひとつの限界といえよう。

そこを解決しようとするのが Wai Chee Dimock²による世界文学という新たな思考の枠組みである。Dimock は、このグローバル時代には国家を中心とする考えを脱して世界文学という文学研究の枠組みこそ有効だと提唱する。それは文学をより大きな文学連続体という枠組みでとらえることで文学の相互関係を流動的に捉えることを意味しており、さまざまな可能性を秘めているといえる。アメリカにおける移民文学は、移民出身国の文学と横断的に研究される傾向と必要性が往々にしてみられるが、それは世界文学として論じられうるということでもあ

る。アジア系アメリカ文学はまさにそれに当てはまり、そこには当然アジア地域の文学が論に加わることとなる。筆者はこの考えを基として、まずはマレーシア発信の英語文学を分析したのだが³、必ずしも英語で書かれた作品にこだわる必要もないと認識を新たにした。というのもそれぞれの地域における世界への発信が意識された作品であることが重要だからである。ただし英語がグローバル言語として世界文学には大きなツールとなっているために、他の言語で発表されたものでも結果的には英語訳によって世界文学として論じることもありうる。

以上の文脈から、本論文はインドネシア語で表現された文学を取り上げ、インドネシアにおける日本植民統治の表象を検討する。インドネシアは親日国家と日本では認識されているが、75年以上前に日本が植民統治した東南アジアの国のひとつでもある。独立してからの言語はインドネシア語であり、そこからの発信は英語圏ではなかなかなじみがなく、日本でもあまり親しまれてはいない。そのため筆者はこれまで取り上げることができなかった。だがよく調べてみると、日本占領の記憶は大きなトラウマとして文学にも反映されている。そこで注目したのは、イスマイル・マラヒミン (Ismail Marahimin)⁴の『そして戦争は終わった』(*And the War Is Over*)という長編小説である。タイトルの「戦争」とは太平洋戦争を指しており、日本軍との関りにおけるインドネシアの終戦前後を描いた作品である。この作品はインドネシアで1977年に出版され、その年のジャカルタ芸術会議の懸賞小説で二位に入賞したのち翌年同会議賞を受賞し、さらに1984年にはアメリカでペガサス文学賞 (Pegasus Prize for Literature)を受賞したいわば定評のある作品といえる。とくに後者はルイジアナ州立大学が主催したモービル社 (現エクソン社) 後援の文学賞で、英語に翻訳されていないマイナー言語で書かれた優れた文学に与えられ、受賞者は賞金に加え英語翻訳と出版の特典を受ける。こうしてマラヒミンの作品は英語翻訳で出版され、結果としてインドネシアという地域から発信されたメッセージが世界文学として広がったのである。日本でも90年に翻訳が出ており、本論文は英語訳と日本語訳を照合しつつ分析を試みることにする⁵。

作者イスマイル・マラヒミンは1934年に北スマトラのメダン (Medan) に生まれている。30年代生まれは太平洋戦争を子ども時代に体験した世代であり、世代的には戦前、戦中世代に続く、戦争を体験はしていないが目撃をしているという戦前最後の世代⁶だといえる。この世代に共通するのは、日本植民が記憶の中におぼろげながらも残存しているとみられることだ。マラヒミンは大学を卒業後英語教師となり、その後ハワイに渡りハワイ大学マノア校大学院で1971年に修士を取得した。帰国後ジャカルタにあるインドネシア大学文学部英文学科の教授として英語と英文学を教え、また新聞や雑誌へ多く寄稿したが、1977年に唯一の小説『そして戦争は終わった』を発表した。彼自身は2008年にジャカルタで亡くなったが、2011年にはこの小説の英訳版がロンタール財団の *The Modern Library of Indonesia* という英訳されたインドネシアの代表的文学アンソロジーに収められており、インドネシア文学の記念碑的作品と位置づけられている。なお日本語訳を手掛けた高殿良博のあとがきによると、次作としてオランダ人を中心とする作品の構想があったというが⁷、これは未発表に終わっている。

日本軍のインドネシア占領の歴史経緯

作品紹介に先立って、作品理解に不可欠である日本のインドネシア占領の経緯を俯瞰しておく。1930年代より日本は米国の禁輸措置によって鉄、石炭、石油、ゴム等の資源を確保できなくなったため、東南アジア支配による資源確保を目論んだ。そして1941年の真珠湾攻撃とほぼ同時に、マレーシア、シンガポール、マニラを攻撃して占領し、その後半年で東南アジアの国々を次々に制圧したのである⁸。インドネシアはそれまで350年間オランダに植民支配されていたが、1942年3月に宗主国オランダの日本に対する無条件降伏によりオランダの植民支配は終結し、日本の支配下に入った。ただし広大な島々に広がる全土が一斉に制圧されたのではなく徐々に日本の植民支配が広がったため、占領の時期も内容もばらつきがあるとされる⁹。

日本占領は、当初はオランダの圧政に苦しんでいたインドネシア人民に歓迎され、独立へ希望を持たせたが、実態が明らかになるにつれ失望と反感が広まった。日本が標榜している「大東亜共栄圏」すなわち欧米植民地

からの解放という旗印は、祖国の独立につながるものではなく、新たな植民地主義に他ならないと分かったからである。ただオランダが長年に渡って農政を中心とするインドネシア経済を全面搾取し、少数エリート知識人を養成する以外はインドネシア人に対する教育をしない政策を取り続けてきたのに対し、日本の植民政策が大きく異なっただけではある。日本が行った政策で今日に至る成果としては、米産業の育成、インフラの整備、教育制度の制定、そしてインドネシア語の策定などが挙げられる¹⁰。オランダはコーヒー、サトウキビ、藍の栽培を強制し利益を独占していたが、日本は独自の稲作技術を伝授して米栽培を推奨し、現在の高い生産量に至る道筋をつけた。ただそれは戦争の長期化に向けて大量の日本兵を養う目的でもあったことはいまでもないし、戦争の終末期には米を収奪し人民を踏みこみについたのも間違いない。教育制度の整備も、日本から人材を送り込むよりはるかに労力が少なく済むという思惑の上にされたものであり、インドネシア国民の利益に立地したのではなく搾取目的の植民地主義に基づくものだったのである。

以上取り上げた政策は、独立時以降のインドネシアの国づくりに少なくとも役立ったものである。それに対し、インドネシアを蹂躪した植民地システムも当然存在している。その代表が憲兵隊による監禁や拷問、現地人から労務者の徴用、オランダ人捕虜への強制労働などである。憲兵隊も労務者も、インドネシア語にいまなおケンペイタイ、ルームシャとして残っているというくらい強烈な記憶を刻んでいる。憲兵隊は皇民化教育に従わないものを叱責しスパイの摘発を過酷な方法で行い、現地在住の日本人に対しても容赦なかった¹¹。ただ場所によってこの行為には差があったとみられる。労務者とは日本軍の戦線維持に必要な大量の労働力として現地で徴用したインドネシア人労働者を指し、1943年終戦までに約410万人もが動員されたとみられる¹²。オランダ人に関しては、当初大量のオランダ人捕虜を収容するのは軍の過重な負担になるとして居留地制限にとどめていたが、1943年から方針が変更されて強制収容となった。ジャワ島で7万人、スマトラ島で1万2千人以上のオランダ人が劣悪な収容所に収容され、多くが強制労働に駆り出された¹³。収容所は食料不足や虐待暴行を伴う劣悪な環境下にあり、東南アジアの収容所の中で最も死亡率が高く、これが重大な戦争犯罪として戦後オランダにおける軍事裁判で裁かれたのである。

日本の敗戦と無条件降伏の後にインドネシアの独立宣言が出されたが、多くの国民はそれを直ちには知らされなかった。その後日本軍の撤退に伴い、大量の武器を連合国の指示通りにインドネシアに渡すか否かで日本の方針は二分され、結局武器の供与を巡って戦闘なども起き、武器の約半分がインドネシアに渡りオランダとの独立戦争に寄与したとされる。こうして最終的にインドネシアが独立したのは、日本の降伏から4年後の1949年になってからである。

『そして戦争は終わった』の主要な問題点

上記のインドネシア占領の経緯はどのように作品に反映され、何が問題とされているのか、『そして戦争は終わった』を概観してみる。本作品の最も大きな特徴は、3つのカテゴリーの人々が登場することにある。すなわちインドネシア人、日本人、そしてオランダ人捕虜だ。作品全体は3部から成り、それぞれの章冒頭にはその章の内容を象徴する詩が掲げられている。このエピグラフは3種の人々を象徴する詩として3つの言語で揭示され、それに続く翻訳で読者には内容が伝わる仕掛けとなっている。第1章の詩は有名な童謡“Are you sleeping, are you sleeping, Brother John?”がオランダ語版で示される¹⁴。フランス発のこの童謡はキリスト教の影響を受けたもので、オランダ語による揭示はこの宗教的背景をも示唆している。オランダ人捕虜間の抗争にキリスト教が関与するからだ、ともかくこの章はオランダ人捕虜を中心としていることがこの詩に示される。第2章には桃太郎の童謡が日本語で掲げられているが、日本人になじみの意味合いではなく戦士の歌とされている。つまりこの章が焦点を当てるのは、日本人の軍人というわけだ。そして最終章に掲げられるのが、インドネシアのスマトラ地方に伝わる4行詩で、子供の遊ぶ鬼ごっここの歌を原語で掲げる。これは明らかにインドネシア人が最終的にどうな

るかを象徴したものであり、日本のインドネシア支配の終焉が何を起こすかが描かれる。結局3つの原語の童話は、3つの民族と言語が交錯するストーリーを象徴している。それぞれの言語は重要な意味を持ち、だれがどの言葉で話をし、それをだれが理解し理解しないか、ということも重大な結果につながる。このように全編が明瞭に異なる3部に分けられているのは、読者がそれぞれの世界に入り込み理解してゆくための巧みな仕掛けだといえる¹⁵。

この3者を代表する登場人物のさまざまな経緯と交錯が作品の骨組みをなしている。ことに日本軍人の小瀬(Ose)、インドネシア人女性のサティヤ(Satiah)と、オランダ人捕虜のウインペ(Wimpie)は3者を代表する中心人物と位置づけられるが、いずれも民族の典型からはずれている。小瀬は穏やかで消極的なために昇進が遅れている軍人、サティヤは運命に翻弄されながらも性的にアクティブで前向きな女性、ウインペは捕虜だが暴力的で捕虜仲間から恐れられている人物だ。これらの人物を取り巻くのが、残虐な日本軍人、身の処し方が巧みな土地の有力者や商人、神父をはじめとする従順なオランダ人捕虜たち、というステレオタイプ通りの人物群だ。

物語の始まりは、終戦間近の1945年8月の火曜日で、翌水曜日に終戦詔勅が出されたと示されるため、終戦前日である。場所はスマトラ島西部のジャングル近くの日本軍駐屯地だが、そこまでの厳しい歳月はほとんど割愛されて、戦争の終結近くに起きる騒動が3者の関わる場として描かれる。その騒動とは、終戦間近とは知らないオランダ人捕虜たちの逃亡の企てだ。捕虜たちは長年のひどい待遇に耐えかねて逃亡を企み、それに手を貸すのが日本軍に徴用されたインドネシア人労働者の一人だ。ここにオランダ人とインドネシア人対日本軍人という構図が見えるが、実際はそれほど単純ではない。

上記したとおり第1章はオランダ人に焦点を当てており、オランダ人捕虜が厳罰を覚悟しつつも逃亡を目指すことが中心事項となる。10名の日本兵が31人のオランダ人捕虜を率いるスマトラ島のトラタックブル村の駐屯地では、捕虜はそれほどひどい虐待を受けてはいない。穏やかな小瀬中尉が指揮官だからだ。とはいえ捕虜たちはスマトラ島を横断する鉄道建設に駆り出され、連日重労働を強いられている。事故や飢え、マラリアや虐待などで大勢が死亡している現場だ。彼らの間で逃亡を主張するウインペと戦争の終結を見通している神父(Pastor)に路線対立が生じるが、ボクサーで腕力に勝るウインペが最終的に主導権を握る。ウインペは逃亡計画を作成するが、地元民の協力なくてはジャングルを通り抜けられない。その役目を負わされるのがインドネシア人の労働者クリウォン(Kliwon)で、弱みを握られて従わされており、彼の取り計らいで逃亡の手筈がほとんど整う。

(作品に登場するスマトラ島現地地図)



第2章は歌が示すように日本の軍人に焦点を当て、小瀬の敗戦の日の行動と思考が中心となる。彼はこの村の州都パカンバル(Pakanbaru)にある日本軍総本部に指示を仰ぐために赴く。各地からの将校が集まった総本部で、最高司令官が日本の無条件降伏を伝える。その場あるいはその直前に自刃した将校が数人おり、小瀬の親友もその一人だ。敗戦は軍人たちを動揺させるが、君が代と軍歌で心を落ち着けた後にそれぞれの配属地に戻る。この間に計画されていたオランダ人捕虜の逃亡計画は、小瀬が不在でその間指揮する兵士木口の容赦なさを警戒して延期となっている。小瀬の帰還を待って決行する手筈だ。

最後の第3章はインドネシアの人々に焦点が当たる。小瀬の帰還時に合わせて、オランダ人たちの逃亡が実行される。その周囲に配置されるのがインドネシア人で、ことに重要なのがサティヤだ。彼女は小瀬の身の回りの世話をする女中で、別の村で営んでいた家庭を日本兵に破壊された過去を持つが、穏やかな古瀬に密かに思いを寄せており、ここで起きたすべてを目撃する。小瀬は帰任し10名の部下の兵士を集めて終戦を伝えるが、降伏という言葉は発さない。発せない、というのが正確なところだ。彼が今後の撤退指令を出したその時、オランダ

人捕虜の逃亡がわかって、銃を持って追うよう部下に命じる。逃亡した捕虜たちはクリウオンの手引きでジャングルに逃げ込むが、ウインベはクリウオンと彼を追ってきた恋人レナそして神父を残してジャングルへの橋を破壊して逃げ去る。日本兵はこの残された3人に追いつき、小瀬の撃てという命令で彼らを惨殺する。この3名の葬送作業を終えた小瀬は放心状態で帰営するが、待ち受けるサティヤと初めて向き合い絶望の中で愛を確かめる、というのが最終シーンとなっている。

以上がこの作品のメインプロットだが、多くのサブプロットがそこに絡まって複雑なストーリーを作り上げている。ただ上記したとおり、3つの人種グループ、3つの文化と宗教、3つの言語が重要な要素として物語を貫いている。読み手は整理しつつ作者の語りについてゆくわけだが、明らかにその読みは立場によって大きく異なってくると思われる。そこで日本人として読むという立場から、どのようにこの作品を分析できるかを論考してみる。

記号としての日本語

日本はインドネシアにとって軍事占領し植民支配をした敵国である。インドネシア人である作者マラヒミンは、それに対する批判を様々な仕掛けで全編に浸透させている。まず目立つのが日本語表記だ。日本語表記は日本人にはすぐに理解できるが、インドネシア語や英語の読者には馴染みがない可能性が高い。しかし繰り返して使用するうちに、その意味が次第に分かってくる仕掛けとなっている。まず年代と時間の表記が目につく。「皇紀」¹⁶という現代の日本人にもなじみ薄い年号が頻繁に使われ、19〇〇年という年号はまったく出ない。時間もわざわざ東京時間〇〇時となっている¹⁷。(皇紀)2605年が昭和20年、すなわち1944年だとわかる日本人は今ではほとんどいないだろうが、他国にとってはまるで別世界だ。つまりこれは、インドネシアが戦争により異次元の世界に変貌したということの表現に他ならない。ある意味では時間はもはや意味がないわけだ。行動をすべて制限あるいは支配されている状況下では、時間は自由にならない。命令がすべてであり、オランダ人捕虜も労務者も日本人の命令で日課をこなす毎日なのである。時間もまた、日本人だけが用いる記号というわけで、だれもが持てる自由を意味しない。

頻出するロームシャ(*romusha*)とケンペイタイ(*kempeitai*)という日本語は英訳ではイタリック体を用いることで目立ち、厳しい抑圧状況を表す記号として効果を持つ。すでに論じたように、日本軍はインドネシアにおいても他の地域と同様な植民政策を取り、基本的に軍国主義を貫いた。この作品ではインドネシアの立場に重点が置かれるため、ロームシャはいわば前面に、ケンペイタイは背後に配置されている。日常的に行われていたロームシャの徴用と労働状況は、国民全員には適用されていなかったことがクリウオンの例に示される。彼は当初はインドネシア人から労務者を徴用する役目をしてしたが、ロームシャが連行されると戻って来ないという事態に対して徴用された人の親族が憤怒した結果、自身もロームシャとされてしまう。だが身の処し方が巧みで、徴用期間が終了しても小瀬の下で働き続け、ある程度の自由と相場の倍額の日当を得るといえば特権的な便利屋ロームシャになっている。これに対し典型的なロームシャとしてはアニスという商人が登場する。彼は18歳以上の男子を集めるという名目で突然徴用され、パカンプウでオランダ人捕虜と共に鉄道建設に従事させられる。ただしこの人物も重労働に耐え兼ねて逃亡し行商を始めてたくましく生き延びることになり、戦中のサバイバルのまた別の例とも読み取れる。ケンペイタイは、もう一方の主要人物サティヤの悲劇に絡んで登場する。彼女はミランという男につきまとわれレイプされるが、これがケンペイタイへの現地人通報者として恐れられている人間だ。彼女はミランから夫をケンペイタイに引き渡すと脅されて、仕方なく性関係を続ける。しかしそれを知ったミランの妻がサティヤの家に怒鳴り込み、サティヤの夫はショックで死に家族は崩壊、サティヤは村人全員から糾弾されて居場所を失いさ迷いつつ、最終的に小瀬の手伝いという働き口を見つける。以上二つのエピソードは、ロームシャもケンペイタイもインドネシアの穏やかな共同体を引き裂き、人々を翻弄した仕掛けだということを明らかにする。作者はこの存在を現地語でなく日本語を用いることで、日本が与えた傷の大きさをより強く響かせることに成功している。

天皇と無条件降伏

太平洋戦争に関する記述は天皇を避けることは難しく、終戦前後を描くこの作品も当然その記述はあるが、その場面は限られている。まずは第2章の最後、英語訳では“By that time, the announcement from *Tenno Heika* that the Dai Nippon Army was to cease all forms of aggression against the Allied forces was more than eight hours old” (p.102)は、イタリック体で表記されており、天皇陛下という日本語訳よりも目立つ。これは小瀬を含む日本軍が敗戦の詔勅を知らされる場面であり、天皇の命ならば受け入れざるを得ない状況と描かれる。この場面前後で自刃する将校が数名おり、その殉死の行為をその場に居合わせた軍人たちは止める気力も失っているとされている。実際に終戦に当たってこれだけの軍人が自殺したという記録は残っていないが、日本人の特攻隊の事実や切腹の伝統からこのような場面が設定されたと思われる。切腹は多くの戦争文学に取り上げられているが、それだけインパクトの強い純粋かつ衝撃的な日本人に特異な行為であり、ここにマラヒミンのいささかオリエンタリズム的な日本解釈が垣間見える。

天皇については、小瀬が帰營して部下に敗戦を伝える場面にも記述がある。小瀬はどうしても天皇の無条件降伏の詔勅をそのまま伝えることができない。彼は“Why am I lying? Ose asked himself. He could not make himself say that the Dai Nippon Army had surrendered and that *Tenno Heika* himself had delivered the announcement.” (p.154)と、その葛藤を自己批判する。ここには小瀬という人物の造形の工夫が示されている。彼はいわゆる日本軍人らしい思考や行動とは異なり、穏やかな性格で暴力的な行為を避けつつ行動して来た。終戦に際して衝撃を受けても、親友の宍道のように自殺といった過激な行動は取らないし、それに共感も示さない。それでも日本の軍人として、天皇による無条件降伏の詔勅という現実を受け入れられない。マラヒミンはこのように、小瀬に最大限の人間的な感情を与えてはいるものの、上記の場面においては、あくまでも頑固な愛国者である日本軍人として悩ましさを行動に織り込んでいる。さらにここに欠かせないのが日の丸と君が代であり、敗戦という衝撃的な事実の緩和剤のように両方の場面で日の丸の下で君が代が斉唱される。ここで日本人読者は、今なお君が代と日の丸が軍国日本を代表する国歌国旗であることを認識させられる。インドネシアの人々が持つ国旗国歌のイメージは、この描写のように敗戦という時においても意識高揚と誇りを誇示する装置なのだ。この否定的な示唆は、天皇という言葉と存在がインドネシアにとってはあくまでも否定的な意味を持つことを明瞭に示している。そしてこの感覚は、おそらく戦争を知らない読者にもこのような場面を通して伝わると思われる。

コミュニティの齟齬と連帯

日本人、オランダ人、インドネシア人という三者のコミュニティはそれぞれ必ずしもまとまりを見せているわけではない。支配側に立つ日本人の中では、暴力と抑圧を信条とする木内たちとそれを積極的には支持しない小瀬の間には齟齬が生じている。ただし厳しい軍隊の規律は決定的な分裂をもたらすことはない。このコミュニティでは個人の意思は徹底的に抑圧され、人間的な感情の交流は止められている。だが最終場面での小瀬の命令による虐殺が示すのは、日本人は根本で残虐性という共通点を持つということが示される。これに対し、オランダ人捕虜は戦闘派と平和派に分裂し、同じような苦境の下でも真の意味での連帯は不可能とされている。また、オランダ人コミュニティにはキリスト教信仰が色濃く反映される一方で、捕虜同士の暴力事件も日常的に起きており、置かれた状況の厳しさが人間性を奪うことが示される。それは被植民者であるインドネシア人にとっても同様で、コミュニティとしての連帯は難しい。日本軍に内通しケンペイタイの手先となってサバイバルを模索する者、山の中で戦前とはほぼ変わらぬ生活を続けるいわば我が道を行く者、そして誇りを失わず抵抗を模索する者など様々な生き方があり、それぞれが生き延びるのに精一杯な状況だ。オランダ人コミュニティにインドネシア人が手を貸して逃亡させるのもまた、サバイバルというキーワード抜きではありえない。被抑圧者同士が互いに連帯して事態

を打開しようというのではない。こうして支配者も被支配者もコミュニティとしてはまとまることはできず、その結果悲劇が生じることになる。マラヒミンは冷めた眼差しで、最後にオランダ人とインドネシア人が日本人の手で惨殺されるに至る極限的状况を描き出す。これは、戦時下ではいかなるコミュニティも内部的にもまとまらず外部とも連携できず、連帯とはまったく無縁の状況だったことを示しているわけである。

抑圧と抵抗

被占領者にとっては、占領側の抑圧をより激しく自らの抵抗をより強力に描きたいところだが、マラヒミンはそれを複雑な展開で示すことで効果を狙う。彼が示すのはインドネシア、オランダ、日本という3つのコミュニティに人種、文化などが絡まる抵抗や抑圧であり、抑圧よりもむしろ様々な形の抵抗を中心に据えている。その筆頭に來るのがオランダ人捕虜の逃亡計画だ。これは作品全体の中心事項であり、日本軍に対する抵抗であるの言うまでもない。だがこの抵抗はオランダ人コミュニティにおける亀裂を生じるものともなる。その対立は神父が信奉する平和派とウィンペの闘争派の間に生じ、結果的には闘争派が多数を占めて最終的には全員がそれに従う。だが一方、平和派が日本軍の言うなりになるというわけではない。神父は、神がこの苦難から自分たちを救出してくれるからウィンペの逃亡計画は勇気のある行動とは言えない(英訳、p.40)と仲間には説く一方で、日本兵に向かって“You Japanese are acting inhumanly and disobeying the rules of the Geneva Convention.”(同、p.94)と正面から日本軍の非人道的態度を非難する。彼はさらに“These Dutch internees are people, not animals.”(p.95)自分たちは動物ではないと続けて糾弾するが、これがマレー語による告発であるために日本兵にはまったく通じず、その語調や態度がきわめて反抗的ということから激しい殴打を受ける結果となる。ここに示される神父の正攻法ともいえる抵抗が仲間の共感を得られずに日本兵の暴力的抑圧を招く結果となるのは、極限状況における不条理を巧みに描き出している。抵抗と抑圧の関係は、多くの場面でこのように不条理だと示されるのだ。

しかしサティヤの抵抗は不条理には行き着かない。既述したようにサティヤは幸せな家庭を破壊され、故郷から逃げ出して生き延びる方策を求め宍道という小瀬の親友の軍人に出会ってレイプされる。ここからが彼女の示す最大の抵抗で、彼女は絶望して手許の刃物で自殺を図る。ところがそれがスマトラへの船上だったため乗り合わせた多数の現地人ルームシャが知り大騒動となって宍道は笑いものとなり、結果的に彼女は宍道のものとはならず小瀬のもとで働くことになる。これはインドネシア女性として日本軍人に対する最大の抵抗を示した行動であり、抵抗がサバイバルに結びついたまれな例である。サティヤが最終的にすべてを見る傍観者の立場に置かれているのは、そのサバイバルの有効性にほかならない。

この作品のクライマックスは、明らかに最後の場面で、オランダ人捕虜たちが逃亡し、日本兵がそれを追跡して逃げ遅れた3人を銃殺するところだ。これはまさに抵抗と抑圧の悲惨な結果を示すものだといえる。ただ、その後には不可解な場面が最終シーンとして展開されている。殺戮と葬送を終えた小瀬が帰営し、待ち受けたサティヤと初めて個人的な話を交わすのだが、ここで初めてお互いが歩み寄り理解を深める。そして次第に愛情が高まり、サティヤの“sleep with me.”(p.167)という言葉がこのシーンを締めくくる。この最後の言葉は日本語訳では「一緒に…休みましょう…」(p.223)となっており、「私と寝て」といった英語とはいささかニュアンスが異なるが、いずれにしても部下に手を下させたとはいえないインドネシア人2人とオランダ人1人を殺した現場から戻ったばかりの人間が、なぜこのような穏やかな愛の場面に入ることができるのか。ここには作者の大きな意図があると考えべきだ。つまり、小瀬という人間は人格が分裂しており、片方に穏やかで理性的な部分、もう片方に暴力的で刹那的な部分を併せ持つのである。彼は大部分の人生を前者として生きてきたのだが、軍人として無条件降伏という事態を受け止めきれず暴力的な方向に暴走する。それが、撃てという指令だ。3人を射殺するという帰結に罪悪感や後悔の念は示されない。それは義務であり日本軍人としては当然の帰結なのだ。彼は敗戦軍の将

校としていずれは自分が連合軍に裁かれることも覚悟している。しかしどれほど覚悟しても、それを支えるもう一人の穏やかな自分が心もとない。そこにサティヤの持つやさしさと思いやりが大きな癒しとして意味をもつ。抵抗と抑圧は最終的にこうして一つの形に収束すると示されるわけである。それゆえに、作品全体の帰結としてはいささか強引な印象は免れないが、この二人の関係に象徴されるのが日本とインドネシアの抵抗と抑圧を統合した相互理解なのだと解釈できよう。マラヒミンはこれが戦争のひとつの帰結だと示しているのだ。ただしその後を全く描かないのは、オープンエンドにすることで解釈は読者に委ねるということでもある。この後、小瀬はサティヤと共にどこかに逃げ込んで最終的には裁きを免れるのか、連合軍に裁かれ戦犯として刑に服するのか、あるいは日本に戻るのか、さまざまな解釈は可能なのだが、それをあえて示さない。読み手はこの最終場面で自分の立ち位置により多様な解釈を許容されるのである。

語ることと語られること

この作品で語られることと語ることから浮上する作家の意図を世界文学という枠組みから考えてみたい。まずは語られることから検証すると、語られているのは戦争の状況で、しかも終戦の前後という短い時間を切り取っている。なぜどのように戦争が起き継続したかなどは徹底的に削ぎ落されている。これは戦争の一面、それも極限的な部分を取り上げることによる劇的効果を狙ったものだ。日本支配の実態をより詳細に描くことも可能なのだが、それはある意味で戦争のインパクトを弱めることにもつながる。マラヒミンが取り上げたこのきわめて短い時間における3通りの生き様は、日本支配の複雑さと残酷さを浮上させている。それは支配者と被支配者それぞれが内包する複雑さと残酷さにはかならず、戦争がもたらす極限的状况そのものなのである。

作家マラヒミンはこれを語ることで、何をめざすのか。それは明らかに記憶の伝承である。戦争が人間に与えるものと奪うものを究極の形で示すことで、伝える意味が浮上する。彼が終戦前後の数日という限定的な時間に起こった出来事に集約させたのは、戦争がもたらす人間の災禍である。戦争を小説に描くのはたやすいことではない。劇的な事件があってもそれをどのように伝えるかで事実は全く異なってくる。まさに作者の手腕こそが重要なポイントとなるわけである。マラヒミンがインドネシアの限られた空間と時間に起きたことを記すのは、デイン・Q・レの指摘のように、語られなかった個々の物語に光を当て歴史を紡ぐ作業にほかならない¹⁸。そこで伝えたいのは、インドネシアにとってこの戦争がどのような意味を持つかであるのは間違いない。それはインドネシアの植民の歴史と切り離すことはできない。日本の敗戦は、オランダと日本によるインドネシアのはく奪の歴史を描くのものにもっとも適切な切り口なのだといえる。そしてインドネシア人がその歴史に翻弄されつつサバイバルを模索する姿は、この国のアイデンティティを考える上でも極めて重要な手掛かりを与える。3つの言語と文化、そしてその相互関係が戦争という極限状況においてどう作動し最後の融和に至ったかを語ることで、作家は読者に歴史認識をさせる。ここには歴史の複層的な解釈を可能にする手掛かりが示されているわけである。と同時に、その解釈がインドネシアのアイデンティティ構築への道筋となることが期待されているといえるのではないか。

最終的にこの語りの特徴は、アメリカに移民したアジア系の作家とどう異なるのだろうか。この作品は、アジアにおける日本植民統治を取り上げるアジア系アメリカ人作家がたいていは描くアメリカあるいは連合軍の関与には全く触れていない。日本の敗戦は当然そこに絡んでいるわけだが、そういった問題解決にいたる役割はまったく登場しないのだ。日本の敗戦はそこに起きたという記述、日本の支配が終結するという事実、そしてそれがインドネシアにもたらすのは何かという見通しはほんのかすかに示されている。明らかに語られることと語ることからみえるのは、インドネシアのことに尽きるのだ。連合軍やアメリカの軍勢力や日本軍の戦禍や敗因といった事項には一切触れない。つまりこの点において、この作品はこれまで論じてきた日本植民統治を描いたアジア系アメリカ文学とは大きく違うといえる。冒頭に述べた世界文学という概念に照らし合わせて日本植民統治を取り上げた文学群を比較してみると、このマラヒミン作品は多くの作品とは異なり、日本の敗戦前後という歴史の一点からイ

インドネシアの来し方と行く末を俯瞰したものと位置づけられよう。多くの作品は被植民地のアジアの国家のアイデンティティの模索を最終的に取り上げる傾向にあり、その点においては『そして戦争は終わった』も同じ方向を持っている。だがそこに向かう道筋こそは独自のものであり、インドネシア人作家マrahiminの世界にはほかならないと理解できるのである。

※本研究はJSPS科研費(基盤研究(C)16K02513)の助成を受けたものである

注

- 1 上林は日本の記録も記憶も自国の国民と国土の被害に偏っていると2015年に指摘している。
- 2 Dimock, Wai Chee (2007)のIntroduction参照。
- 3 河原崎(2020)参照
- 4 インドネシア語の地名、人名などはすべて高殿良博の日本語翻訳に準じて記載した。
- 5 基本的には英語訳を参照し、日本語訳は補いとする。それは出版年(英訳が先行)と世界的に読まれる言語という2点からである。
- 6 水島久光(p.15参照)の定義による
- 7 『そして戦争は終わった』p.235
- 8 岩崎参照
- 9 『二つの紅白旗』参照
- 10 『アジアの人々が見た太平洋戦争』参照
- 11 『ふたつの紅白旗』p.71以降にはケンバイタイの経験に関する証言がある。
- 12 『アジアの人々が見た太平洋戦争』参照
- 13 中野聡、p.125
- 14 英語訳ではインドネシア語と英語の併記、日本語訳では「ねぼう太郎」で始まる直訳のみが示されている。
- 15 3言語の理解を補うために英語版ではGlossaryが付録としてあるが、日本語版には最後に注が付けられ言語以外の事柄も説明されている。
- 16 ただし皇紀とは記されておらず、昭和となっている。
- 17 初めて使用された時、英訳では“the year 2605 Showa of the Japanese calendrical system or A.D. 1945”(p.6)、日本語訳では「皇紀二千六百五年(西暦一九四五年)」(p.10)と西暦を補っているが、その次からは2605年と記され西暦は併記されていない。
- 18 デイン・Q・レ(2015)参照

引用参考文献

- Dimock, Wai Chee & Buell, Lawrence, ed., *Shades of the Planet—American Literature as World Literature*. Princeton University P., 2007.
- Marahimin, Ismail. *And the War Is Over*. (Translated by H. McGlynn), Louisiana State University P., 1987. Reprinted by Grove Press, 2002. (イスマエル・マrahimin『そして戦争は終わった』高殿良博訳、勁草書房、1991.)
- Shigematsu, Setsu & Camacho, Keith L. ed., *Militarized Currents—Toward Decolonized Future in*

Asia and the Pacific. Univ. of Minnesota P., 2010.

岩崎育夫『入門 東南アジア近現代史』講談社、2017.

インドネシア国立文書館『二つの紅白旗—インドネシア人が語る日本占領時代』（倉沢愛子・北野正徳訳）木犀社、1996.

上林格「忘れない／でも主張しない シンガポールの華人社会」朝日新聞、2015年9月1日夕刊

小神野真弘『アジアの人々が見た太平洋戦争』彩図社、2018.

河原崎やす子「日本の植民統治の記憶—近年のアジア系アメリカ文学に見る傾向」『岐阜聖徳学園大学外国語学部紀要』第56集、2017年。

____、「マラヤにおける日本占領の記憶—Tan TwanEngが描く戦争と人間の絆」『岐阜聖徳学園大学外国語学部紀要』第59集、2020年。

グラック、キャロル『戦争の記憶 コロンビア大学特別講義 学生との対話』講談社、2019.

コンスタンティーノ、レナト編『日の丸が鳥々を席卷した日々』（水藤真樹太訳）柘植書房新社、2015年.

鈴木静夫、横山真佳編著『神聖国家日本とアジア—占領下の半日の原像』勁草書房、1984.

中野聡『東南アジア占領と日本人—帝国・日本の解体』岩波書店、2012年.

藤井非三四『知られざる兵团 帝国陸軍独立混成旅団史』国書刊行会、2020

水島久光『戦争をいかに語り継ぐか—「映像」と「証言」から考える戦後史』NHKブックス、2020年

モーリス・スズキ、テッサ『過去は死なない—メディア・記憶・歴史』（田代泰子訳）岩波書店、2004年.

レ、デイン・Q「アートで探るベトナム戦争 人々の声届けるプラットフォームに」朝日新聞Globe版、2015年9月6-19日: 10-11.